
佐久間さん家の恋愛事情

天羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

佐久間さん家の恋愛事情

【Nコード】

N0049W

【作者名】

天羽

【あらすじ】

佐久間さん家は今時珍しい5人姉弟。

それぞれお年頃になり、将来の伴侶を決めていきます。

長女・次女は高校生で、三女は中学生の時に、長男・次男は社会人になって。

さて、彼等のお相手はどんな年齢で、どんな職業なのでしょう？
自サイトぶちへぶんにてシリーズ化していたモノの、転載だったり
リライトだったり。

若葉マークの恋（次女の事情）

「なあ」

「はい？」

「好きですって言うてみ？」

書きかけの英単語のスペルは、その瞬間全て忘れてしまった。

動揺のはて目を上げた先で、混乱を招いた本人は涼しい顔でおみそ汁を啜っている。密かに恋するキレイな横顔はどんな感情も写していないのに、なんでもないのでケロリとしてるのに。

どうして私だけ本心を隠そうとおろついているんだろう。一気に朱に染まった頬を見せまいと躍起になっているんだろう。冗談言つて、からかつてるだけかも知れないじゃない。

「優ちゃん素直やもん。バレバレよ」

けれど、そんな希望はいとも簡単に打ち消され。

カリカリと音を立てるお漬物だけが日常と非日常を繋いでいるのがすごく滑稽で、かち合った瞳が心臓を握りつぶす不意うちから逃れる機会を失わせる。

恐い視線。

深く潜って沈めておいた秘密を暴く、自白剤みたいな。

「…言ったら、いいことありますか？」

認めて失うものの方が多いなら、私はここにいたい。

中途半端は大きな幸せをくれないけれど、大きな不幸も招かないから。

臆病な問いに最後の一口を飲み込んだ彼は、フツと笑みを刷くと声を潜めた。

「それは言うてからのお楽しみ」

我が家は今時珍しい5人姉弟で、故に家計にはいつも余裕がない。大学へ進学したお姉ちゃんはいバイトで学費を稼いでいるし、弟妹も自分の未来に向け鋭意努力中。

かくいう私も夢である看護師になるため日夜勉強に勤しむ現状で、ただどちよつともう限界かも。バイトの合間、塾にも行かず独学での受験勉強はさして頭の良くない身には厳しくて、そのうえ無謀にも奨学金まで狙っているんじゃない以上は無理だと思う。

と、すっかり諦めモードだった時、救いの神は現れたのだ。

「ちよつと女の子にだらしがなくて口と態度は悪いけど、頭はいいよ。夕ご飯を与えれば家庭教師くらいしてくれるけど、どう？」

いささか不安ではあっても背に腹は代えられず、親切なクラスメイトの紹介でその人に会ったのは一月ほど前。

「こんにちわ。北条聡介言います。仲良うしてな」

待ち合わせ場所に現れた大学生は、チラチラ振り返る女の人の視線を当然みたいに受け止める格好の良さで私を怖じ気づかせて。なのに、楽しそうな笑顔に恋に落ちたのもその瞬間だった。

週に2日、夕食を食べながら勉強を教わるようになってかなり経つけど、先生は風子ちゃんの言うような人だとはとても思えなかった。

5時にチャイムを鳴らし、食事の支度が調うまでの間弟妹達の宿題まで見てくれて、それから私の問題集と一緒に戦ってくれる。

8時に家を出るまで不埒な言動もなく、それどころか行動は紳士で理想の男の人ってこんな風かも知れないと憧れと妄想に拍車がかかる日々。

「優ちゃんはなんで看護師さん、目指してんの?…そこ、ちごとるよ」

「あ、はい。…えーと、手に職つけておけばお嫁に行けなくても生きていけるかなあと。…これでいいですか?」

「ん、オッケ。君なら相手に不自由はせんと思うけどなあ」

「そんなことないですよ」カレシいない歴18年ですから。おかわりいます?」

「お願いします。そら、周りの男に見る目がないわ。今時ちゃんとご飯の作れる子おは、そうおらんのかなあ」

「あははは。じゃ、告白するのにお弁当つけたら、うまくいきますかね?」

「餌付けな、いい手や思うよ。ここに一匹、すっかり手懐けられた男もおるしね」

なんて、楽しく過ごす3時間弱がほんのり幸せ。

けれど、転機というのは思いがけず、やってくる。

土曜日はバイト日和とでも言ったらいいのか、とにかく普段より稼げる素晴らしい日で、朝コンビニで早朝手当つきの数時間を過

した後、午後はファミレスで笑顔を振りまいていた。

「いらっしゃいませ、お客様何名様ですか？」

「あれ、優ちゃん？」

マニュアル通りのセリフに続いたのは人数ではなく、微妙にイントネーションの異なる聞き慣れた声で。

「先生……」

隣には彼の美しい容姿に負けない美女が、さりげなく腕を組んで立っていた。

それはいつも先生の後ろに見えていた現実。

敢えて目をそらし、憧れてオブラートでくるむと気づかないふりをした真実。

「知り合い？」

「カテキョしとんの。生徒さんよ」

優しく微笑みながら短い遣り取りで説明できる私という存在が鋭い痛みを胸に残したけれど、まだ知らないフリで誤魔化せる。傷はそれほど深くはない。

「いつもお世話になってます。おタバコお吸いになれますか？」

「ん。喫煙席でお願い」

「はい。ご案内致します」

頬が痛くなる作り笑いで窓際に2人を案内しながら、知らなかった先生をたくさん知ったんだとぼんやり思う。

彼女がいて、タバコを吸って、私や弟妹に見せていた顔は恋愛用と

は全然違つて、家の中から一步出たら先生との関係はとても希薄で。なにより、彼にとって私は女のカテゴリーに入っていないことを。

本気の恋をしたら、不眠や食欲不振と付き合わなければならないんだと知る。

苦しくても胸を占める先生の面影を追いつけないから、夜は眠れず。

食事をしようとする彼女さんの顔とそれを甘く見守る笑顔を思い出すから、食欲は消えてなくなる。

子どもでも大人でも、初めての恋でも100回目の恋でも、症状はきつと同じなんだろう。

少し前まで楽しみで仕方なかった火曜と木曜が、苦痛で憂鬱で気持ちが沈んで仕方なかった。

「もうすぐ期末やね」

「そうですね」

上手にサンマをほぐしながら何気なく零された一言に、曖昧な相づちを打つほど集中力に欠けていた。

期末で頑張るにはこのごちゃごちゃした気持ちを片づけてしまわなければとか。例えばすっぱり忘れるとか、告って玉碎とか……家庭教師を断る、とか打開策を検討していて。

「の割に、心ここにあらず、やんな？」

「…そんなこと、ないですよ」

ありまくりだけど、認められない。

究極の選択で迷う私は、傍目にやる気がないとか弛んでると見えることなど先刻承知なのだ。

良くないとわかってる。わかってるから悩んでるじゃないの。いっそもみだで選択してみようか？

愚にもつかないことをつらつら考えていたから返事は当然おざなりで、

「なあ」

「はい？」

「好きですって言うてみ？」

手痛い不意打ちを、食らってしまった。

固まったままいつまで経っても返事をしない私を、食事を終え流しに食器を運んでしまった先生が促す。

「このままおつても答え出んでしょう？ちよい気分転換をしよう」

イスの背に掛けたままだったコートを着せて2階に外出を告げた彼は、大きなバイクの後ろに私を乗つけると、

「しっかり捕まっとつてな？」

悪戯つぽく笑って冷たい風を切り、近くの公園まで移動する。

それは歩いたって5分ほどの目と鼻の先で、なのにわざわざ10分も遠回りをしてやっとなどり着いて。

私の腕は先生のお腹と同化するんじゃないかと思うほど強く回されていた。

仄かに香るコロンとタバコの匂いが心臓を押し上げて苦しくして、やっぱり好きだと涙が溢れそうだから。言うて、みようか。

気持ちに蓋をして忘れることは、できない。

告白もせず2度と会えなくなったら、後悔に押しつぶされる。

良くも悪くもケリをつけるには、走り出した恋心を納得させるには。

「…好きです…」

よく耳をすましていなければ、聞こえはしなかったろう。

2人ともヘルメットを外したところで、私はバイクから降りてさえいなかったから。

じつと黒光りする金属を眺めていた視界が恐怖で歪む。

どくどく聞こえる心音が煩い。妙に静まりかえった周囲が、沈黙を永遠に変えていくように逃げ出たくて仕方なかった。

断った方がいい、気を遣う必要なんてないから早く答えを聞かせて。1秒でも早く、この状態から解放して。

「良くできました」

だけど返事は予想に反して、甘い声と意地悪く歪んだ唇。

そして、羽のような、キス。

「いつくら凧子に頼まれてもな、飯と引き替えなんて悪条件じゃ力テキョは引き受けんよ」

「じゃあ、なんで…」

「そりゃ、恋してしまったからねえ」

ふふつと笑うどこまでが本気なのか、初心者の私にはちっともわからないけど、でも。

都合良く解釈してもいいんじゃないかな。

抱きしめる腕は痛いほど強く、触れる唇は驚くほど熱いから。

無理してんのが見え見えで、俺やつてもう限界やったから。

「なあ」

「はい？」

「好きですって言うてみ？」

驚いて目を見開いたのも、あっという間に赤く染まった頬も、これまでのどの瞬間より可愛くて、素知らぬふりで飯を食い続けんのはひどく骨が折れた。

「じゃ、お願いね？」

泣けるほど鈍い尻子は、人の気なんぞ露程も知らず残酷なことを言いよる。

頑張り屋で素敵なクラスメイトが困ってるからカテキョをしてやってくれないかと。報酬代わりの晩飯付きで、真面目に本気で付き合うなら口説くのもオツケーって。

諦めはしたけど好きだった女にこんなお願いをされる俺はなんて不幸なんや。そんで冷たく断ることもできん未練らしい恋心はみっともなくもいじらしい。

本音言ったら今すぐイヤやて駄々こねたいけど、かつこっけの俺はそうもできんから偉そうに言っただった。

「ええけど、まずかつたらすぐやめんで？」

飾り気のない子おやな、が第一印象。

スカート丈が短いとか、襟元がルーズなんはそこいらの子らと変わらんけど化粧はしとらんし、髪型も邪魔にならんようくくつとるだけ、元はそんな悪ないのにもつたいない、の答えは自宅を訪れてすぐわかった。

「優姉、洗濯物入れといた」

「お米炊いてあるよ」

「ありがと、すぐご飯にするからね。寧ろ手伝って！」

「はい」

共働きの両親不在の家を、彼女は弟妹と一緒に切り回して、僅かに残った時間をバイトと勉強に充てている。

身なりに構う時間も金もそうなく、けど最大限の努力はしてると手入れされた爪と綺麗な素肌が証明していた。

「すみません、たいしたもの作れなくて」

恥ずかしそうにテーブルに並べてくれたんは、餃子と炒飯、サラダにスープ。

彼女似の素直で可愛い弟妹に囲まれて口にした料理は、家庭料理としちゃ充分すぎる及第点なのに。

「…しょっぱいよ、スープ」

「こつも大きさの違う餃子ってどうなんだ？」

「焦げてる…炒飯」

そうかあ？うまいやないの。

「できた」

10分も悩んだ数式が解けた瞬間、顔一杯に広がる微笑みは子供の無邪気さで、故に俺では届かない。

「がんばったな」

だが、欲に負けて手を伸ばし躊躇って、結局触れることが叶わず指は細い髪を絡めた。

「え、あ、せんせ…」

結ばれた先を蛍光灯にかざすようサラリ落として、放たれた光に焼かれて目を細める。

「キレイやねえ、キラキラしてる」

視線が交わるたび、体が近づくと、ピクリと反応する彼女を抱きしめたいと思うようになったのは、いつからやったやろ。

1人の時、思い出す姿が凧子でない女の子になったのは？

「お、お茶！煎れてきます！！」

うつむいてなすがままだった子おが、勢いよく立ち上がって部屋を出て行ってしまった。

「逃げられたか」

残念と笑みを刷いて、呟く声が彼女に届いたらええのに。

滑るように消えた髪と姿。掌に残る微かな香りが嬉しくて、握りしめる。

何も知らない君を教えんのは、俺の仕事。

けどな、勉強の押し売りはできんから、上手に追いつめてあげるよ。

堕ちておいで、腕ん中へ。真実を認める為に。

予想以上の反応に内心ほくそ笑む。

わざわざ女連れでバイト先に顔出したかいがあるっちゅうもんや。ただの教え子や言ったことも功を奏したみたいで、随分へこんどるし。

あと一押し、なんやけど、危ないなこれは。玉砕か諦めかグラグラ不安定な足場で迷うとる。

早まる前に正しい道を示してやんのが、残る俺の仕事か。

「好きですって言うてみ？」

恥ずかしいと思う暇もないほどキス、したげるから。

ぎゅっと抱いて、不安を全部消したげるよ。

なのに、躊躇いは踏み出す力を奪ってしまったようで、考え込んだまま彼女はピクとも動かない。

じりじりする膠着状態をなんでもないことのようにやり過ごして、俺は欲しい一言を引き出す為の最後の賭に出た。

否が応でも体が密着するバイクの後ろに彼女を乗せて走り出す。

気づいて、俺やって好きなんや。

一目で落ちた恋ではないけれど、少しずつ確実に染みこんだ想いが全身を巡り今やすっかり君の虜。

心臓、早いやろ？体、熱なってるやろ？

おんなし。回した腕の力で必死に気持ち伝えようとする彼女と俺は寸分の狂い無く、おんなし。

やから、な？どんなちっさな声やって聞き逃したりするはず、ないんや。

「…好きです…」

可愛い告白のお礼は、触れるだけのキス。

さあ、短い猶予の始まりや。しつかり覚悟しい？2度目にその唇に触れる時、俺はもう手加減せんよ。

潤んだ瞳で見上げた顔に、まだ信じられないと書いてあるからなんて事無い真実をプレゼント。

「そりゃ、恋してしまったからねえ」

まだ信じられんの？そうか、そんならじっくり教えたげんとね。

腐っても、教師やし。

期末試験、希望大学にA判定がもらえる点数を取れた私は喜び勇んでそれを先生に報告して、思いがけないご褒美を貰うこととなる。

「そしたら、息抜きも兼ねて海にドライブしよ」

飛び上がって喜びたかったけど、同時に真っ青にもなった。だって、それってやっぱりデート、だよな？あんまり実感はないけど、その付き合ってるんだし、えっと…なに、着てったらいいの？どんな話するの？待ち合わせとかは？え？え？

泣きついた凧子ちゃんは、まかせてって言うってお買い物に付き合

ってくれた。

襟と袖口に白いファアの着いたコートと膝丈のAラインスカート、ブーツに緩く巻かれた髪はこうしてねって、彼女がアドバイスをくれたそのままんだけど、どうだろう？

お兄さん、つまり凧子ちゃんのカレシの持ち物だそうな車でお迎えに来てくれた先生は、車から降りると固まってしまったから、私だって動揺してしまう。

どこか、変？スカート短いの似合っていないとか、あ、ジーンズの方がいいのかな。ちよつとキュート路線すぎるんじゃないかとは自分でも思っただけ、並んで歩くのもイヤなほどとか…。

「あの、着替えて来ますっ」

「待って、待って！そのまんまでええて、っーか、それでおって下さい、お願い！」

羞恥で真っ赤になった顔を見られまいと慌てて踵を返した腕を、先生の掌が強い力で止める。

言われた内容をにわかに信じられず振り向けないままを引き寄せられ、背後から抱きしめられて顔は更に熱くなって。

「ごめん、あんまり可愛いんでなんも言えんようになってしまった。似合うとるよ、すごく」

う、嬉しいんだけど…その…。

「先生…恥ずかしい、です」

ここは、家の真ん前で、土曜の早朝だから通行人もいないけれど、いつこ近所の人に出会つとも知れない道路の上なわけで、甘い言葉で手放しに褒められることも抱きしめられていることも、なんか全

部、どうしていいかわからないほど恥ずかしいのだ。

小さく呟いた私の声に、ああそうなって微かな笑いを漏らした先生は、離れ際耳に派手な音のするキスを残して、去っていく。

「理性飛んで、状況も読めんようになってしまった。大失態やね」

助手席のドアを開けてなれた仕草で私を座らせた彼は、シートベルトを締めてくれながら不意を突いて口づけを。

「んっ」

驚く暇を与えずにどんどん深くなるそれは、いつしか湿った水音を伴ってどこまでも私を混乱させた。

夢みたいに告白して、羽みたいなキスを貰って以来2度目の触れ合いは、想像を遙かに超える生々しさで襲ってくる。

キスって、マンガで読むような映画で見えるような綺麗なものじゃないんだ。舌と舌を絡めて歯医者さん以外には触られたことのない口の中を掻き回される。

好きでもない人としたら絶対吐き気を催しそうなその行為が、カレシとだった気持ちいいとさえ思える不思議。

「2人の時はセンセって呼んだらあかんで、言っただよね」

上がった息のまま見上げた顔は、唇を妖しく光らせて微笑んだ。

「お仕置きにキスなんてべたなもん笑うって、思ってたんやけどな……ええかも」

また、知らない先生だ。

優しくて面白いだけじゃない。強引で傲慢で、少しエッチな顔し

た、人。

「き、聞いてないです、そんなの…」

名前で呼んでは言われたけど、お仕置きがあるなんて知らなかった。それも、こんなの…なんて。

抗議を込めて押し返した胸は、びくともしない。それどころか、じりつと更に近づいて、唇を触れ合わせたまま掠れた囁きに胸がぎゅつといたくなる。

「うん、今決めたから。優やって…嫌いじゃないやろ？これ…」

…嫌いじゃ、ないです…。

できる女と、できる男、その結末（長男の事情）

出世なんか望んでないし、ましてや結婚したくないなんて口が裂けても言ったりしない。

あたしは平凡な主婦になるのが夢で、子供だって3人や4人は欲しかったのよ。

なのに！

「井上チーフ、資料間に合いません」

「泣いてる暇あったら、自分の脚で探しに行きなさい！」

「チーフウ、予定の半分もできてないんですけどぉ……」

「根性、気合い、使えるものを総動員すれば何とかなるわ」

「すいません、今日本当にプレゼンするんですか？物理的に無理なんじゃ……」

「それを部長に言ったら、どうなると思う？」

戦場のごとき企画室内を取り仕切る立場に自分になろうとは……予定は未定ってよく言ったものね。

誰でもいいから、ここにあたしと結婚してくれるって男を連れてきて！寿退社させてよう、お願い。

「井上チーフ」

「はいっ?!」

泣き言さえ言わせてもらえずこの期におよんでまだ仕事を押しつけるつもりかと、殺気立って振り返った先には社内結婚したい男ナンバーワンが立っていた。

「星野課長」

うんざり見やった営業二課の冷血課長は、もちろんあたしが一生を共にしたい相手では断じてない。

というか、お金を積まれてもお断りしたい。きつとそれは彼も同じだけだね。同期の中じゃピカイチに相性が悪くて、顔を合わせればいがみ合う周囲に言わせると『同族嫌悪』の二人なのだそうで。

だから、奴は神様があたしの望みを聞いて送り込んでくれた夫候補でないことは確か。フロアも違うここに降って湧く理由さえないとくれば、厄介ごとを持ち込んできた予感ヒシヒシと。

つんと顎をあげて、ごった返す部内を視線で示すと先制攻撃。

「先に断っておくわ。忙しいのよ、絶望的に」

ところが敵も百戦錬磨の強者。鼻につくせせら笑いで軽くいなしで来るじゃない。

「先に断っておこうか。こっちも譲れない用件でな」

火花どころか爆発が起こりそうな緊張にもめげず、己の仕事を悲鳴混じりにこなしていく愛しの部下達はよっぱどせっぱ詰まってるに見える。

いつもなら物見高い視線が集まってくるのに、今日は閑散としたもの。静かに星野と言い合うというのも、物足りないような、よけいな茶々を入れられる心配がなくて好都合のような、なんとも複雑な心境ね。

どことなく締まりに欠ける言い合いに肩すかしを食らった気分だったんだけど、星野はあたしの様子なんて気にかけることなく背後の人間を指し示す。

さっきからチラチラ見えてはいたのよ。長身の奴とさして変わらない上背で、にこにこ人好きのする笑みを浮かべたそりゃあ若い男

がね。まるで新卒みたいじゃない…？

果てしなく嫌な予感がするから、知りたくなかったりもするけど。

「まさか、でしょ」

「正解だ。我が社期待の新人、佐久間宝。本日より企画課井上チーフの下で2ヶ月間の研修に入る」

やっぱりかあ…死滅しかけた記憶の隅で、部長が一月後はうちにくるからよろしくなって無責任に笑ってた光景がフラッシュバックしたのは幻じゃなかったのね。

なんであたしが面倒見んのもって拳を固めた自分も見えたけど。

「どうして、今よ」

きつちり固めてある髪は、掻きむしれないのがよろしくないわ。それほどいらつく内情を紛らわせる術はなくて、叫び声をかろうじて押さえた私にできることと言ったら、下げたくもない頭を下げて奴に助けを求めることなんだから、情けない。

とりあえず今日1日、何とかしてもらえれば誰かどうか手が空くのよ。

仇敵じゃなく、哀れな同僚を救うと思って、それがひいては社の為になると溢れる優しさでフォローしてもらえないもんかしら。

「今日だけでいいの、そっちで預かってくれない？」

虚構と欺瞞に満ちた懇願は、だがしかし相手を見て発動すべきだったのだ。

初めてお目にかかる穏やかな微笑みを浮かべた星野は、真逆の冷徹な口調で意図も容易く言い捨てたんだから。

「断る」

で、くるりと踵を返して颯爽と退室ってわけ。
ふざけんなっ！ちよっとくらい、検討してろっての！！

「鬼、悪魔、人間のくずー！！」

高笑いで返した奴を、飛び道具さえあればあたしは撃ってたね、間違いなく。蜂の巣にしてたさ、穴だらけさ！

「まあまあ、落ち着いて下さい、井上チーフ」

「あんたが言うな、元凶！」

優しく宥められたって嬉しくも何ともないわ、むしろむかつくのよ佐久間宝！

限界を超えヒステリックに喚く女上司はきっと、あたしがもっとも嫌うタイプの女に見えたに違いない。

ほら、三十路近いとやけにぴりぴりして余裕なくって、仕事にもプライベートにも焦りまくってますう、ってあれよ、あれ。

実際30は目前だしね、仕事は切羽詰まってるし、私生活はあるんだか無いんだかわかんないくらい今パニくってるけど、爆発だけはさせないよう気をつけてたのに、大失態！でも止まらないわ、暴走した感情って。

勢いづいてたまった不満やら怒りやらを無実の新人に投げつけまくって、ストレス発散をしまくってたあたしは次第に落ち着いてくる自分と共にひとつ理解したことがある。

佐久間宝という人物は、やたらと女の扱いに長けてるってこと。

あ、誤解ないように言っておくけど星野と違ってたらし風ってのじゃないわよ？ヒスを起こした女を刺激せず大人しく話を聞いている

姿勢が、こんな場面に慣れてるなっと感じさせるの。

現に、すいません、大丈夫ですか、大変でしたねの相づちでかなり落ち着いたあたしは、己を恥じることが出来る程度に冷静さを取り戻しているものね。

「ご、ごめん。初対面だっけ言うのにいきなり八つ当たりから始めちゃって…」

素直に非を認め頭を下げると、伺い見た彼は一瞬瞠目したあとにつこり微笑む。

「気にしないで下さい。社の決定事項とはいえこんな時に来てしまった僕も悪いんです」

…このセリフ、星野に聞かせてやりたい。ああ、彼の爪の垢を煎じて飲ませてやりたい！

さっきの奴が少しでも佐久間宝と同種の優しさを見せてくれたら、喚くこともなかったのに。

いいわ、いいじゃない！顔は充分可愛らしいんだし、いるだけで癒し系小動物くらいの働きはできるわ。仕事教えるのは明日まで待つて貰って、取りあえず今日は邪魔しない程度にぶらぶらしてつてことで手を打ちましょう！

非常事態に解決の光明を見いだしたあたしはすっかり機嫌も良くなって、生暖かく新人を見守ることができそうな心理状態になっていた。冷静な井上チーフ復活よ。

「雑用得意ですから、パシリだと思って都合良く使って下さいね」

けなげなことを言う可愛い新人は、大好き！

笑顔を絶やさない好青年、悪いけどいいように使われてちょうだ

い！

振り返れば猫の手も借りたい忙しさの企画室。小生意気な研修社員はいらないけれどバイト並みに働く気のある君なら救世主にだってなれるわ。

藁をも掴むつもりでありがたい申し出を受けた後、単純作業に人手を必要としていた部下に彼を貸与したのは大正解だったと、終業時間が来る頃に知った。

可愛いだけでなく、仕事もできる男だったみたいよ、佐久間宝は。

研修中の新人ごときには破格すぎる歓迎であると、指定された店を見ればわかった。

洒落たダイニングバーは10名弱の団体に何とか対応できる広さしかないけれど、雑誌にも紹介される有名店で、なるほど会費の高さと比例した雰囲気の良いさと納得できる。

職場の飲みにしたら高級すぎるかも知れないけれど、男を口説くには最適。

幹事になった子は確か佐久間宝の1年先輩だったものね。充分射程圏内、将来有能な男には今から目も手も付けとくのが得策だと、よくこ存じていらっしやる。

せいぜい頑張るのよ、あたしみたいになる前に……って自分で言うててイタイ、イタイ。

三々五々に集まってくるメンバーが思い思いの席に散らばっているのを横目に、一番邪魔にならない場所、つまり出入りのしやすい端にどかり腰を下ろしてタバコの先に火をつけたあたしは、疲労と現実の無情に長々紫煙を吐き出した。

仲間が親交を深めようつてところに、上司がいつまでもいるほど野暮なことはない。更にそれが、有望株を奪い合う合コンに兼ねら

れていたのなら、邪魔者はさっさと消えて然るべきだ。

30分ほど付き合ったら適当な言い訳をつけて退散するのが礼儀、デリカシーよ。

…本音を言うと、ただ休みたいだけは、オフレコだけだね。

3日前、死ぬ気で上げたプレゼンがようやくお偉いさんのお眼鏡にかなって、追加提案も修正も終わった週末、リラクゼーションと休息に全力を傾けないときっと倒れる。

無駄に遅くまで街をふらつくよりお風呂に入って眠りたいっての。酒より栄養ドリンクを欲しているのよ、体は！

そんなあたしのことなどお構いなしに、元気な若者による元気な会合はスタートするわけで。

はしゃぐ女の子と、目の色が違う男性諸氏と、5つ、6つの年の差は体力からテンションまでかなりの隔たりを見せつけてくれた。

佐久間宝狙いの子達も、その子等を狙う子達も、赤勝て白勝てみんながんばれって蚊帳の外なら気楽に応援できるわね、ホント。

「相変わらず、タラタラ飲んでるな」

そんな愚にも付かないことを考えているから、こんな馬鹿が隣に座っていることに今の今まで気づけないなんて醜態をさらしてしまったのだ。

嫌ってほど見覚えのあるニヤケ顔は、不覚にも過去愛を語り合うなんて馬鹿なことをしてしまった男で、くやしいことに同じ課にいて三つ先輩で上司だったりする、加納義樹。

今晚はあたしのチームの打ち上げで新歓なんだからこいつがいたら変なのに、どうしているのかしら。しかもなんで耳打ちとかしち

やうわけ？必要以上にくつつくの。

「大きなお世話様ですわ、係長様」

わざとらしく椅子を引き派手に距離を広げて顎を上げたのに、少しも応えてはいないと再び近づいてくるから空気が読めない、神経が太い。

だけどその崩れた相好の奴が、いい男に見えてた時期があったんだから、恋って盲目、恐ろしいわ。

ま、世間一般ではエリートって言われちゃう部類だし、見かけもそこそこあたしも若かったってことで、キレイさっぱり忘れたいんだけどね。

こう周りをうるちよろされたんじゃ、それも難しい。

「つんけんするなって、可愛くないぞ」

「結構じゃないですか。そう言っただけで相手は未だに可愛げがなければ、良心も痛まないでしょ？」

めいっばい吸い込んだ紫煙を思い切り奴の顔に吹き付けてやれば、少しは胸もすくってもの。

数年前、溺れきり惚れ込んでいた相手から

『泣いたり笑ったり縋ったり、喜怒哀楽がはつきりした可愛い女が好きなんだ。慧子の強さは尊敬できるが、好きじゃない。だから、別れよう』

笑顔でにつこり、なのに随分はつきり言われたもので、しばらくは何も考えられないくらい落ち込んだのだ。

傷ついた心の分、ヤツのプライドを踏みつけたっていいじゃないの、ねえ？

だって、治せないんだもの。20数年この性格できて、今更キヤラ変えられないでしょ。

なのにふざけんじやいないって切り捨てられないほど彼が好きで、最悪なことに別れた後も出勤したら顔を見ちゃう環境で、かといってこのご時世気軽に転職もできないし、だから。

気を紛らわそうと必死に仕事をしていたら、男はできないし婚期も逃げた、いいことなし… ってだんだん腹が立ってきたわよ。

「…全部こいつのせいだ」
「何か言ったか？」

こそつと呟いた声が聞こえていないことにまたむかついて、呑気な顔をひと睨みすると手元のカクテルを飲み干し立ち上がる。

「おい、どこへ…」
「帰るんです」

あんたが消えないなら、あたしが消えるまで。元より長居するつもりはなかった店を出ることに、未練なんか爪の先ほどもないわ。むしろ不快な物体を視界に入れときたくないって感情の方が強い。見下ろした体勢から高慢に睨み下ろし、バッグを拾ったら踵を返して格好良く立ち去るつもりだったの、邪魔なんか入らない予定でね。

ところが、ぐっと引かれた腕が計画の狂いを全身に伝えてくる。ピンヒールがクラリとバランスを崩し、踏鞴を踏んで思わず舌打ちが出てしまった。

「放してくだ…っ」

全く、しつこいっ！と、出かかった声が認めた微笑みに一瞬詰ま

って、消える。

「帰るんですか？」

加納係長の向こうから伸びた手の先には、子犬のような佐久間宝がいつの間にかいて、どうしてなのか周りの女の子の不満そうな様子は無視であたしなんかを引き留めていたのだ。

てつきり危険行為に及んであたしの足を止めたのは係長だと思ってたのに、何故彼が？既に酔ってて、最悪なことに絡み酒とか言うんじゃないでしょうね。お局様でも幼稚園児でも墮とせそうなアイスクリームスマイルを、むやみやたらと人に向けたら、犯罪だってお巡りさんに捕まっちゃうんだから。

けれど絡め取る微笑みは、まずいことに真っ直ぐこちらをターゲットにして、

「帰ってしまうんですか？僕はまだ、チーフと一言も話せていないのに」

…くらっと、きたわよ。

うつす暗い照明の下だっというのに、お構いなしに殺人光線を撒き散らしてからに！思わずぎゅっと抱きしめたくなっちゃったじゃないの！！どうしてくれよう、この小動物！

なんて心の叫びはうまく押し隠すのが大人の余裕、下らない見栄。

「ひと月はたっぷり絞られる上司と話すのなんてね、研修最終日だけで充分。余計な感情があると鬼だ悪魔だって私を恨めなくなつて、辛いわよ？」

無表情に、味も素っ気もない口調で言い放って格好をつけてみたのに。

「確かに、慧子は情け容赦ないからな。懐くと後悔するぞ、新人」

人の話に割り込むんじゃないとか、わざわざ名前を呼んでさも自分たちが親しげな仲であるとアピールするんじゃないとか、へらへらするなどが、叫びたい程度にこのバカが全てをぶち壊しにしたわけ。

だけど、唇を噛んで怒りを飲み込んだのは、周囲が聞き耳を立てていると知っていたから。

係長と付き合っていたことは秘密で、そりゃ同期の中には知ってる子達もいたけれど、寿退社で減っていった今同じ課にこれを知ってる人間はいない。心地いい忘却だったっていうのに、どうするの、また奇妙な噂とか立つちゃったら。

耐えがたきを耐えて、忍びがたきを忍ぶのよ！

感情を殺して凍り付いたあたしと、勝ち誇ったように笑う係長。怒りで真っ赤な頭じゃまともな言葉も探し出せないと困り果てていたところに、助け船を出してくれたのは佐久間宝だった。

「ダメですよ、係長。許可無く女性のファーストネームを呼んだりしちゃ、セクハラで訴えられちゃいます。危険です」

ねえっとおどけた調子で周囲の男性社員に同意を求めてくれたから、一拍後、我も我もと上がる体験談や不満、女子からの更なる抗議でその場は上手く収まりがつき。

「さ、チーフも座って、飲み直しましょう？」

爽やかに微笑まれちゃうともう、毒気を抜かれたあたしはストーンと座り直してしまったのだ。

横目に苦虫を噛み潰したような係長を認めつつ、ね。

「……ありがとう」

いつの間にか用意されていたグラスからジントニックを一口と、
小さなお礼をひとつ。

「これ、おいしいですよ」

その笑顔、気付かないフリ？それとも、ホントに分かってない？
彼はそんなあたしの疑問には構うことなく、仕事の話にちよこち
よこプライベートを織り交ぜるって上手な興味の引き方で、夢中に
させて。

いつの間にか、係長のことをあたしの視界からも思考からも消し
てしまった。

年下のくせに、うんと若いくせに。10も年上の頼れる男に見える
この子は、謎だわ…。

何でもそつなくこなす新人なんて嫌みにしかならないはずなのに、
佐久間宝は持ち前のユーモアとキュートな容姿を使って課の中にう
まくとけ込んでいる。

それは前にいたところでも同じようで。

「うちの課でも万人にかわいがられていたな」

ニヤニヤと人の悪さのにじみ出た笑みが似合いすぎる、今最も嫌
いな男がそう請け合った。

「ええ、そりゃあもう、あたしの指導なんていりませんってどうま

くやつてるわよ」

「なんだ、手取り足取り教えたいのか？」

「はあ？そんなわけないでしょ？！」

激昂するこちらのことなどお構いなしに、就業中故おそろしく空いたカフエのわざわざ隣に腰を下ろしてしまった星野はなおもじりじり人の神経を逆撫でるのよ。

「最近、加納の馬鹿がまとわりついてるんだって？」

「…情報源はどこ」

「機密事項だ。一瞬凍り付いた場を佐久間が和ませたと聞いている。事実だろ」

「だったら？」

「うつかり奴に惚れてやしないかと思つてな。ピンチを救う男は輝いて見えるようだから」

「自分がそれで欲しいものを手に入れたからって、あたしまで同じ物差しで見るんじゃないわよ」

「…どういう意味だ？」

「美月ちゃん、可愛くなつたわね」

「どこから聞きつけた」

「それこそ機密事項よ」

ギンツと睨み合う様は、小さい子なら泣いちゃうんじゃないかなろうかという凶悪さ。あたし達にとっちゃ日常茶飯事だけれどね。

美月ちゃんと仲良くなった切っ掛けは、アホほど性格の悪いあたたと対等に、時にはそれ以上に渡り合う彼女に、打倒星野のコツをマジ顔で尋ねに行てから、なの。

切羽詰まったあたしに同情してくれたのか、娘さん同伴で（これにはさすがに驚いた）食事に行つて以来、星野の悪口や他愛ない世間話、果ては人生論まで熱く語つた結果、年の差を越えた友情でも

結ばれちゃったわけよ。

もちろん、彼女の楽しい恋愛話も進行形で聞いているから、こいつの弱みはイヤと言うほど握ってる。でも、それを使って美月ちゃんの恋に水を差しちゃいけないもの、黙ってるわよ。

さつき程度の揺さぶりで、十分効果的だしね。

ま、その辺はともかく。

突然声をかけてきた星野の意図もわからないし、係長の件も知っている、佐久間室に惚れたかと尋ねる等怪しい言動が多い奴には、警戒を怠らないに越したことはないだろう。

そんなわけで、こちらからは一言一句心情を漏らすまいと黙りを決め込んで、不気味な同期の出方を観察に入る。

「…加納の方は、大丈夫なのか？」

予想というのは、裏切られるためにあるのねえ。

平坦な声にきちんと気遣う響きを乗せて、星野はコーヒーをすする何気ない仕草の中、聞いてきた。

「今の所はね。絡まれそうになると佐久間室がタイミング良く横やりを入れてくれるものだから、平穩無事に過ごしてるわ。直接対決を避けてる分、あちらの考えてることがわからないけど、取りあえず目立って害はないし」

「ほう、それはそれは…気味が悪くないのか？佐久間に監視されているようで」

「…ないわね、不思議と」

だから、おもしろい子なのよ、彼。

周囲をうろつく元彼はうざいし気色悪いんだけど、佐久間室が見

かけに似合わない少し低めの声で出してくれる助け船は、むしろホツとさせる安心感をもたらすのだ。

考えようによつたら常にあたしを見てるってことだし、背筋が寒くなつてもおかしくないんだけどね。そこは癒し系小動物の特権ていうのか、可愛らしく微笑まれちゃうと毒気も抜けるっていうか。

「やはり、惚れたんだろう?」

人が心理の妙に浸ってるつてのに、毒と邪気で構築された有害人間代表は、好奇心丸出しに探りを入れてくるからイヤらしい。

「セクハラオヤジめ」

唾棄したあたしに、どつから出すのかその余裕。口角上げて、ついでに片眉上げて、

「俺がオヤジなら、お前もおばさんだろう」

つて。いちいちむかつく男ねつ。

「自覚してるわよ、そんなもん。でも、あたしはセクハラおばさんじゃないわよ?」

「惚れたのかと問うことの、どこがセクハラだ」

「ふん、最近じゃ女がセクハラと言えば男に反論する余地なんてないの。常識」

「…いやな常識だな」

「覚えておいて損はない常識よ」

しばし言い合い、しばし沈黙。

互いに冷え切った珈琲を啜りつつ、実のない会話に砂を噛むと取

りあえず本題に戻るわけで。

「加納はバカだが、悪人じゃない。かといって、自分よりできる女と付き合える器もない。つまるところお前達はどこまで行っても平行線で、死ぬほど好きだった男だからと復縁なんぞしようもんなら、明日はない。わかってるな」

「わかってるわよ。あたしだって何度も同じ男に泣かされるほど、バカじゃない」

こいつに心配されるようじゃあたしも終わりね、と思いつつも他人に氣にかけて貰うのはやっぱり心地いいなと、妙にしんみりしてしまうのは1人の時間が長くなってきた証拠なんだろう。

どっかの歌の文句みたいだけど、横のいけ好かない男ですら一生一緒にいたい大切な誰かを見つけたのよね…焦るなあ。

日本企業のご多分に漏れず、我が社もそれなりの年齢になった女性には結婚やら寿退社やらのお勧めが始まるわけで、その後の進退はともかくあたしだって遠回しにちくちくやられてるわけ。

だけどそんなものより痛いのは、こうして同僚や友人が次々結婚していくこと。全世界の幸せを独り占めしたって顔してね、

『慧子^{けいこ}も早く相手見つけなさいね』

って…何度聞いても哀しくなるのよ、このセリフ。

「…どっかにいい男、余ってないかしら」

カチリとライターが吹いた火をタバコに移して、吐息混じりの愚痴を星野は笑い飛ばす。

「いるだろ、佐久間が」

どこまでも自分の意見に固執する男なんだから。

だけど睨み付けた奴は少しも笑ってなくて、驚くくらい真面目な表情をしてあたしを見下ろしていた。

立ち上がり、空のカップを持って半身を振り返らせながら。

「自分の恋のスタートがわからないって人間は、案外多いぞ。じっくり向き合ってみる、心と」

… なのよね、自分の恋愛はうまくいってるもんだから偉そうにしちゃって。

いつか足下掬ってやるわ。

なにもかも、星野のせいよ。

余計な一言は尾を引いて、ろくろく仕事が手につかなくなったあたしは、今日もムダに残業中である。

花でも咲いてたら思わず原始的な占いをしたくなる程度に混乱していて、突然停電になった自宅であちこち踱く程度には迷っている。

はたして、恋なんてしてるの…？

答えを見つける必要は、ないのよね。人肌が恋しいわけでも、寂しいわけでもない。

仕事が恋人なワケじゃなく、結婚もしたいけど、良く知らない新人がその候補に上るなんて奇跡は論外、あり得ない。

だけど、佐久間宝の笑顔は嫌いじゃない。いえ、むしろ好き…？ 違う、好ましいとか、良い感じとかそんな。

言動も、いいわね。卑屈でなく、高飛車でなく、探りもせず、奔放。

異性と意識するより先に対等な人間なんだと思わせた、彼。神出鬼没にレスキュー魂を爆発させても気味悪くないのは、いい人カテ

ゴリーに属しているからなのか、恋しちゃうかもゾーンに踏み込んでいるからなのか。

「わっかんないわねえ……」

呟いてくるとボールペンを滑らせた書類の隅には、ここ最近お馴染みとなったコイル状の落書きが白を埋め尽くす勢いで舞っていた。

気づけば人っ子1人いなかった暗い室内で、またもや答えのない思考に嵌り込んでたあたし。

増えてゆくのは落書きと書類ばかり、各方面、少しの進歩もないと来ればいやになっちゃうわよね。

「仕事しよ」

没頭してしまうのが一番いいと、知っているから書類を覗く。

今週中に新しい企画を上げなくちゃいけない。それは、佐久間室を鍛えるための手段であり、次のチーフ候補を絞るための大事なお仕事なのだ。

まずまず接触時間が増えるのは、吉か凶か。やってみなくちゃわからないんだから、思い描く時間がムダというもの。、ねえ？でも、やっぱり考えちゃうのよね。バカ星野のせいで！

「うっっ」

どうしたら通常の思考が取り戻せるのかしら？

脱線しては引き戻すを繰り返すことに飽きて、ひつつめ頭を掻き回した後ぱたりとデスクに突っ伏す。

はかどらない、はかどらせなきゃ。間に合わない、間に合わせなきゃ。なのに……

「あの、大丈夫、ですか？」
「うわぁあっ！！」

きゅ、急に何？！後ろから声かけないでよ、驚くじゃない、心臓バクバクするじゃないっ！

大げさに過ぎるリアクションで、椅子から転げ落ちそうになりながら振り返ると、そこにいたのは子犬顔も眩しい佐久間宝。企画課のアイドル男。

呼んでないのにいるとは、読心？！エスパー？！恐いんだか、嬉しいんだか…。

…はぁ？嬉しい…？

我が呟きながら妙に引つかかるそれに、首を傾げて意味を追うんだけど、とてつもなく強い力であたしを呼ぶ物があるからさあ大変。

「良い匂い」

「あ、差し入れです。コーヒーとホットサンドなんですけど、好きですか？」

右手に提げられた紙袋に首を突っ込まんばかりの人間に対して、それは愚問ね。

「好き、大好き。飢えてるから袋ごと食べられそうなくらい、好きよ」

差し出されたそれを遠慮なく受け取って、温かいコップと包みを二つ確認すると笑う。

「奢りの上に、一緒に食べてくれるの？」

手近なデスクから椅子を引き摺って来た彼は微笑むと、並べられたそれらに申し訳なさそうに頭を掻きつつ、すぐ隣りにストンと腰を下ろした。

「貧乏な新人なので、そんなものしか買えなかったんですけど、よろしければ一緒にさせて下さい」

「え？ 充分豪華じゃない。あたし自炊しないから、普段カップラーメンとお茶漬けのヘビーローションで生きてるわよ。ジャンクフード好きだし、コンビ二弁当は友達だし」

おかしな恐縮の仕方をする佐久間宝を、励まそうと言ったはずなのに内容にうつかり呆然とするあたしって、バカ…。

まかり間違って星野の言う通り彼に恋をし始めているのだとしたら、今の女捨ててます発言はどれほどのマイナスだろう。

ヒットポイント半分、かな？ それともレッドゾーン？ どっちにする死に体？

ところが、軽蔑と冷笑を覚悟して恐る恐る伺った佐久間宝の整い顔は、一瞬固まった直後に弾ける。

お腹を抱える大笑いで人相変えて、膝まで叩いてゲラゲラやるのだ。

「チ、チーフっ…それ、女捨て過ぎ…っひどい、生活」

失敬な。苦しい息の間からわざわざ言われるまでもなく、知っているっての。

こちらこそ冷たい視線を彼に送って、少し唇を尖らせると弁明にもならない弁明を試みる。だって、悔しいんだもの。

「いいでしょ、別に。できないんじゃない、やらないだけなんだから。自分のためにごちそう作れるほど1人に満足してないのよ。彼氏でもできれば懐石くらい作ってみせます」

できないけどね、そんなもん。

少々収まってきたバカ笑いの男は、この一言に目尻の涙を拭きながらうんうん頷いて、怒ってそっぽを向いたあたしにホットサンドの包みを押しつける。

「じゃ、それは今度僕が食べに伺いますから、今日はこれで我慢しましょうね」

蓋を外され湯気上げるコーヒー、まだほんのり温かいパン、白々とした蛍光灯に照らされる部屋。

どれもいかにも現実で、疑いようのない日常。

なのに、幻聴が…。

にこにこ邪気のない笑みには、言外に質問を封じる力があると知っちゃった。

…で、ホントのどこ佐久間宝はあたしの心の、何を否定して何を肯定したの？

「ここがうまいんだってさ」

「それはようございました。ところで係長、この件ですが」

「今晚7時でいいか？」

盛大なため息を一つ。

誰か、この終末バカをどっかに葬ってくれないかしら？

あんたの印がなきゃ仕事が先に進まないんだって、にやけた間拔

け面に書類を叩き付けてやれたらどんなに爽快か。

引きつった笑顔に気づいているだろうに知らぬふりで、上司の特権を乱用した無理を通そうとする加納に募る怒りを押さえていた頃、助けは来る。

毎度お馴染み絶妙のタイミングで。

「チーフ。お電話が入っているんですが」

揺るぎない声、邪気の無い微笑みにこれまで加納が勝ったのを見たことがなく、当然本日も佐久間宝の一人勝ちに違いない、予定。なにしろ割って入る理由は正当だから、やましいことをしたり言ったりしている奴が適うわけがないのよ。

クライアントおよび上司からの電話は何にも優先するってルールがある企画課では、佐久間宝が話し中あたしを呼んでも咎めたりできないんだから。

「ありがとうございます、すぐ行きます」

取り敢えず不毛な現状からは抜け出せたわね。

諸事情により、目が合うと少々照れくさい佐久間宝から微妙に視線を逸らして頷いて、安堵とともに踵を返した後ろ姿に今日はめげなかった奴の勝ち誇った声が飛んできたのは、だから、予想外。

「予約入れておいたからな、遅れるなよ」

「はあ?! 何勝手言ってるわけ!」

「騒ぐな。さつさと電話に出ろ」

「冗談じゃないっ!」

「まあまあ、落ち着いて下さい、チーフ」

憤懣やるかたなく、下手したら掴みかかったんじゃないかって鬼

の形相のあたしを止めたのは、やけに冷静でにこやかな佐久間宝だった。

そつと二の腕を掴んでデスクまで誘導すると、口実に過ぎないはずの受話器を持たせて囁く。

「係長は僕に任せて。大丈夫ですから、ね？」

…なにが、大丈夫よ。

新入社員ごときが、研修中のペーパーが、仮にも係長をどうこうできるわけがない。プライベートだって然り、口出しできる道理もないのに、どこから来るかね、その自信。

「……………本当にちゃんと、どうにかしてよ？期待はしてないけど、当てにはしてるわ」

だけど、信じちゃうんだから。そう、思わせちゃうんだから、子犬の皮をかぶったオオカミは、なかなかどうして強かだ。

「誘ったのは、お前一人だぞ」

「あらそうでした？明言なされたわけではないので、連れがいてもかまわないんだと思いましたわ」

ロビーで待ち伏せた（待ち合わせではなくて、あくまで待ち伏せね）加納の元に、佐久間宝と連れだって到着したあたしは彼を同行することを告げて、冒頭の台詞を頂いたわけ。

「あ、お邪魔ですか？ご一緒したら」

「もちろん邪魔だ」

「全然かまわないわよ」

控えめな問いに真逆な返答をされても佐久間宝が困ったりしないのは確認済みで、だからあたしから余裕が消えることはない。

気の重い退社間際、彼に『さあ、行きましよう』って言われて至極簡単でひどく子供っぽい屁理屈にくすりと笑ったことを思い出した。

そうよね、加納は一言も『二人で食事を』とは言っていないんだもの、佐久間宝を連れて行こうと、

「係長、チーフ、お待たせしました」

「フレンチ楽しみ」

「こんな大人数でいいんですか」

課の女子3人のを同行しようと、問題は無いはず。

「な、おいっ」

「あら、かまわないに決まってるじゃない。社内でも人気の高い加納係長を落とすチャンスよ。みんな頑張っ」

「はっはい」

うつたえる奴を遮るように送ったエールは、さりげにあたしが『優良物件争奪レース』からはずれているアピールでもあるって、加納はわかったかしら？

部内でも選りすぐりの玉の興志願者は、仕事より身だしなみや気配りに磨きをかけた精鋭で、本人は認めないだろうけど、奴が好むタイプの女の子なのよ。

性格は不一致、仕事面でも衝突の多いあたしなんかと時間を潰すより彼にとって有意義な食事会になることは間違いないし、てことで

「では係長、良い週末を」

微笑んで佐久間宝を従えと、颯爽とロビーを後にした。

華やいだお嬢さん方の声も、加納の低いうなり声も聞こえないふりで、すがすがしくね。

「あはは、すっきりしたわね」

今宵ばかりは光化学スモックに覆われた夜空も、美しく見えるわ。グンと大きく伸びをして、本日の功労者を振り返ると暗がりには邪気のない笑顔がぼっかり浮いている。

「案外うまくいきましたね。皆さん張り切っていたし、月曜日には誰かとうまくいつてるなんてこともありそうだ」

後光が差していそうな雰囲気だったから、言ってしまったのかも知れない。

「…予定がないなら、飲みに行かない？おごるわ」

下心が、ないとは断言できない誘いを。

「喜んで。いいお店、知ってるんですか？」

佐久間宝と2人、どうにかなってしまいたい夜は、更ける。

しゃれた店に連れて行かなかったのは、最後の防衛線とところかしら。

それとも、あたしの趣味につきあえないような男はいらないって、つもり？

自分でもわからなくなりながら、おいしいおでんをつまみに日本

酒を過ぎるほど空けて。

「赤提灯って、うまいでしょ？」

キンと冷えた外気に火照った肌を洗わせながら、全く酔っていないように見える佐久間宝を振り返った。

「ええ、すごく…あ、前気をつけて」

「平気、平気」

気遣う腕からするりと逃げて、ふらりふらりとアスファルトを踊る。

恋してるって、全身が騒いでた。

ぐずぐずの出会いから、探り合うような日常、決定打は他愛のない会話と少しのお酒。

浸透するまでに時間のかからない、男。

子供の無邪気さで人の中に入り込んで、しっかり根を張ってしまったじゃない。

今日がなければまだ、自覚症状はなかっただろうに、こうなってはもう後の祭りね。認めるわ。

「ねえ…？」

スポットライトのような街灯が、佐久間宝をより輝かせる。

惚れた弱みも手伝って、ピカピカとこれ以上ないってくらい格好いいじゃないのさ、とろけるほど優しく微笑むなんて、卑怯よ。

そこかしこに闇があってよかった。紛れて、情けないあたしの笑みを隠せるもの。不安に歪んだ、顔を。

「なんですか」

態度も表情も、なにもかも常と変わらない彼と、一步踏み出せば壊れるかも知れない恐怖は、酒の勢いでごまかしてしまおう。

何事にも、タイミングが命だから。ここは、逃さず掴まなきゃ。

「あたし、あなたが好き、みたい」

噛みしめるように言って、くるり半回転すると星も見えない夜空を仰いだ。

沈黙は、恐い。返事をされるって想像するだけで、逃げ出したくなるほどの恐怖に苛まれるなんて、学生時代ぶり。

「聞き流してくれていい、酔っぱらいの戯言よ」

だから、早々に逃げを打つと醒めてしまった頭で白々しい酔っぱらいを演出して2歩3歩、佐久間室から、距離を取る。

追いかけてはダメよ。女のプライドはね、実は男より余程高いんだから、駆け引き無く簡単に動揺したりしない、怯えて見せたりしないものなの。

心の機微に聡い彼のこと、そんな心情も察してくれるだろうと高をくくって、あたしは回ることで今あった事を消してしまおうと、バカなこと、考えてた。

やっぱり、酔いは簡単に醒めたりしないって、間拔けた行動が証明してるとも気づかず。

「…危ないって、言ったのに」

とうに手放した平衡感覚が、知らぬ間に電柱を近づけて、故に佐久間室をも近づけていた。

背後からあたしを抱きしめ低く掠れた声で、彼は忠告をくれる。

「いい逃げなんて、しようとするからいけない」

それは、危険行為に対するものでなく。

「貴女が全てを酒のせいになろうとするなら」

勢いよく振り向かされて、背を電柱に押しつけられて、表情を隠すようあたしの肩口に額を押しつけた佐久間宝が、唸るように続けた。

「僕だって、酔っている」

キスは。

これが、なんでも器用にこなす男かと疑いたくなるほどに、乱暴で。

カチリと当たった歯が、どこかを突き破り血を流させても、なお終わることなく。

鉄錆味の口づけなんて、もっとあたしを熱くする。

「挑発、するから…」

「…してないわ、少しも…」

繰り返して、繰り返して、場所も時間も痛みも忘れて、やがて…溶ける？

朝日に晒されたら、よく見える現実が恥ずかしくて逃げたくなるってわかっていたから、逃げようとしたのに。

「…随分、早起きですね」

細心の注意も総て水の泡。ベッドが軋む僅かな振動で目を覚ました彼は、捕らえた手首を握りしめてあたしを見ている。

凍るほどに冷たく、焼けつくほど熱く、相反する視線を絡めながら。

「そう？休日はずることがたくさんあるんだもの、時間を有効利用するための手段よ」

「冗談でしょ。この前、休みの日は寝倒すって言ってたじゃないですか」

自分ですら記憶にない台詞を言質に、目を合わせないあたしを良しとしなかったのかベッドに引き戻し覆い被さってキスを。

「…こんなことしてたんじゃ、眠ることもできないわ」

「貴女を逃がさないためだ。疲れて、動けなくなるくらい責めてあげるから…ここに、いて」

強引なくせに肝心なことをお願いなのね。

ずるい。そうされたら断れないって、昨夜さんざん確認したくせに。

肌を重ねながら思うのは、踏み越えてはいけない一線を易々と消してしまった愚かな自分。

熱いキスのせいにして導かれるままホテルに来たわ。お酒のせいにして服を脱ぎ、彼に請われたと言い訳て抱き合った。

全てあたしが望んだくせに。一瞬でも彼が手にはいるのならと、目を瞑ったくせに。

「名前を、呼んで」

日が昇ったら忘れてしまつて構わないから、今だけはあたしのモノでいて。

夢現に溺れ、柔らかな髪を引き寄せて願う。

「慧子」

耳朵を噛むよう囁かれた声を、刹那を刻もうと。

「貴女も呼んで、僕を、お願い」

「宝……だから……」

永遠を欲するのはきつと、こんな一瞬。

……なんて、あんなに盛り上がったのに。

「甘いんですよ、貴女は基本的に」

「えーえーそうね、そんな気がしてきた。すつごく」

人の部屋で、人のお気に入りのソファーに陣取つて、なぜだか機嫌の悪い佐久間宝はコーヒーをすすっていた。

どうしてだか、あたしをがっちり抱き込んでね。

「都合のいい女でいてあげようと思ったのに、なんでわざわざ深追ひするのかな」

「……何度も言つてるでしょ？ 貴女が欲しかったからです」

舌先三寸で彼を説得して、昼前にやっと解放してもらった後よろ

よる戻ったアパートに、まさか襲撃を受けるとは思いもしなかった。勢いでやつちやっただけの上司を、こともあるつか佐久間室はこっさりつけて、まんまと上がり込むとお茶をもらって、この状態。

厄介ごとを好きこのんで背負い込みたいって性癖があるんでなきや、彼の行動には愛がある……ってことになるんだろうけど、俄には信じられないわよね、普通。

「あのね、あたしは君より遙かに年上で、会社でも上司。プライドが命の男にとって、この上なくおもしろくない存在だと思うわけ。前途有望な新入社員ならこんな年増選ばなくても、若くて可愛いお嬢さん方がよりどりみどりよ？」

かなりイタイけど、客観的に見て正しい考えだと確信はある。勢いと雰囲気を利用してしまったやましいさは、その後彼を正道に導くことでチャラにしていまいたいって計算もね。

とにかく、つけ込んだとか言われるのは嫌だし、負い目を感じて付き合ってもらうなんて真っ平って、親切にも遊びで終わらせられるよう、先手を打ってあげたのに。

「わかってますよ、そんなの。だけど、彼女たちより貴女の方が可愛いと思っちゃったんだからしょうがないじゃないですか。格好つけてる癖にホントは子供みたいだとか、実は弱虫で甘ったれなくせに必死で強がってるとか、一度気づいちゃうと貴女がどんなに上手く隠しても僕にだけは見えちゃうんです」

ぎゅっと腕に力を込めた佐久間室は、一際強くあたしを抱きしめて、髪にすり寄るの。そっちこそ、子供みたいに。

「好きなんだ。だから、素直に僕のモノになって」

理屈抜き。それが恋だと知っているくせに、どうしても頭で理解しようとする。

大人になるって、情熱や本能を隠してしまうこと？だから、こんな風にむき出しの熱をぶつけられると、クラクラしてつい、腕を伸ばしちゃうのかしら。

「後悔するわよ、絶対」

「かもね。でも、しないかもしれない。わかんないよ、先なんて」

「バカね、経験者の忠告くらい、素直に聞いてよ」

ゆるりと首に腕を絡め、まだ思うままに走れる若さに苦笑した。
いいわ、いつか置いていかれるのだとしても。隣りに立つことを、あたしは選ぶ。

「あたしのモノになりなさいな」

「そんなの、とっくになってる」

それもそうだと、微笑んで。
契約成立には、キスで捺印。

「ちょっと、佐久間君、彼女いるんだって！」

「嘘っ！だってこの前はフリーだって言ってたじゃない」

「最近できたって言うんだもん」

「げーっそれってもしかして社内？」

「だって。聞いたら『内緒にして下さいね』とか、可愛い笑顔で言うのよ」

「いや〜！誰、誰なの、その女！」

……あたしです。…とか言ったら、殺されそう。

これ、拷問？すっごい精神攻撃じゃない。針のむしろだわ…。陽気で楽しいお嬢さん方は食後の珈琲を啜りながら、神経に障るうわさ話に花を咲かせているわけで、不本意極まりないながら、正体不明の登場人物としてあたしはそこに一枚噛んじやっている次第。

せっかくおいしい昼食を頂いた後だったのに、胃がキリキリと軋むじゃない、ねえ？

「チーフ、ご存じありません？」

なんとか理由をつけて恐怖の会合を抜け出そうと目論んでいたところに、いきなり質問が飛んでくるから、あたしのか弱い心臓は痛いくらいに跳ねている。動揺しちゃうでしょ！元来小心者なんだから、不意打ちとか止めてよ！

「な、なんであたしが知ってるのよ！っか、どうしてこっちにふる！」

激しく騒ぐ胸を押さえつつ3人娘を見渡すと、彼女らは一様にだつてと間延びした口調で大した根拠を述べだした。

曰く。

「佐久間君で、何かとチーフに構うじゃないですか」

「そうそう、面倒見てるって感じで、最近じゃすっかり保護者と園児？」

「係長の大人げない攻撃からも、上手に救出してますよね」

なんって、よく見てるのかしら！侮り難し、女子社員！

しかし、ここで簡単に真実をこぼせるくらいなら、苦労はないっ

ての。噂好きなこの子達を敵に回す愚行だけは冒してはならないと、
ない頭しぼったわよ、本気で。

「…園児って、もちろん佐久間宝のことよね？よもやあたしを捕ま
えて3歳児扱いしたり、しないわね？」

必要以上にドスが効いたことも、無闇と低い声が出たことも、全
ては本心を隠したいがための副産物で、それが証拠に彼女らに走る
怯えと比例してこちらの安心感は募っていくのだ。

どうかこのまま有耶無耶にできますように。いらん追求だけはさ
れませんように。

祈りは通じたのか否か。

「はいはい、就労時間外まで部下をいじめちゃダメですよ」

またしても、またしても。

計ったタイミングであたしの腕を掴んだ佐久間宝が、緊張してい
た空気を一掃して爽やかな笑顔を振りまいているではないの。

「こら元凶！気軽に触るんじゃないの。いらぬ誤解を生じたのは、
そもそも貴方の軽率な行動が…」

「その件はまた、改めてゆっくりお伺いしますから、取り敢えず書
類見てもらえませんか？承認が降りないんで、僕の仕事が終わらな
いんです」

「ええっ？！今、昼休み中…」

「僕は昼休み返上で働いてたんです。知らなかったでしょ？」

知りませんでしたよ、全く！

ぐつの音も出なくなってしまった上司をいとも簡単に立たせると、
保護者とお墨付きを頂いた部下は同席者への配慮も忘れぬ有能ぶり

を披露するのだ。むかつくことに。

「お休みの所、すみません。悲鳴を上げる胃袋を救うために、チーフをお借りしますね」

こうして一礼してしまった彼を、咎めるお嬢さん方ではない。

いくらでもとか、こき使って下さいねとか、好き勝手な送り文句を付けて大切な上司をさっさとレンタルするのよ。小声でも充分聞こえる感想をおみやげにね。

「チーフと佐久間君って、仲がいいけどそういう雰囲気じゃないよね」

「うん。なんか、佐久間君にいいように操られてて、姉弟みたい？」

「そうそう、2人でいると格好いい井上チーフじゃなくて、ちよつと間抜けで可愛い感じ」

言いたい放題言ってくれるじゃないさ。本当は恋人同士なんですけどね、見えませんか？

「…よかったですね、うまい具合に誤解されてるようで」

廊下に出てから、それでも警戒して小声とともに微笑んだ顔にむかついたから、ふいつと横を向く。

「どうせね、佐久間室とあたしじゃ、不釣り合いもいいところよ」

わかってるし、ばれたら困るんだけど、それでも主張したい女心は複雑なの。

会社で拗ねるなんてこれまでしたことなかったのに、彼のせいであたしはどんどんダメになるみたい。向こうはいつだって泰然とし

てるのに、ね。

これじゃ、どっちが年上だかわかりやしない。すっかり手玉にとられてるのはこっちじゃない。

「どうして貴女が拗ねるんですか。僕の方がずっと悔しいんですよ？年下だし、キャリアも地位もなくて、隣に並ぶことさえ許されないんじゃないかって思うのに」

「え…？」

けれど、不安は一緒なんだってしかめっ面に教えられた。

どうしても追いつけない差に、日々無駄な悩みを募らせているのは自分だけではなく、あたしにはあたしの、宝には宝のジレンマがあり続けるのだ。共にある限り、一生。

「結局、自信満々で恋してる人間なんていないってことよね」

呟くと怒ったように睨んでいた佐久間宝の瞳が、ふっと緩んで。

「お互い悩みは尽きないけど、でもそれは好きって気持ちの前じゃすごく些細な下らないことなんですよね」

なのにそんな小さなことに、この先も一喜一憂していくんだろうなあと考えれば、嬉しいような苦しいような。

「もう、恋なんて…悔しいわ」

「でも、楽しい」

人気のない長い廊下で、こっそり微笑み合うまだ秘密の、恋。

夕暮れと、物書きと、中学生

古い日本家屋の小さな平屋、猫の額ほどの庭を望む縁側のガラス戸は、大抵細く開いている。

学校帰りの蜜は弾む足取りで玄関脇を抜けると、遠慮がちに大仰な音を立てるそれをノックして、随分仲良くなった住人を呼んだ。

「こんにちわ」

薄暗い室内へ投げられた決して大きくはない声に反応はすぐ返り、人影は静かに引き戸を開ける。

「いらつしゃい」

低い鴨居をひよいつと避けて現れたのは、むさ苦しいとしか表現しようのない男。

くたびれたポロシャツと洗いすぎたジーンズ、伸びすぎた髪と無骨なセルフフレームのメガネに無精ヒゲ姿は下手をすると変質者、良くてニートといったところか。

中学生の蜜が会に通う相手としては、大いに問題があるように思っのだが。

「今日は暑いですね」

ぺたつと板の間に腰を下ろした少女は、気にした風もなくにこりと彼を見上げている。

「そう？中にいるとよくわからないな」

まばらなあごひげを撫でながらレンズの下の目を細めた男もやはり、年若い客に驚くこともなく隣りにアグラをかいた。

呑気な空気が遅い午後の時間を更にゆっくり動かして、2人の間をのんびり流れる。

29才と14才。彼等は恋人同士ではない。

年が邪魔しているとか、倫理観がなどという俗っぽい理由ではな

く、ただ一緒にいると心地いいから時を共有する、それだけの間柄。

「秋夜さん、夜行性だから」

「うん、実はさつき起きたんだよね」

「原稿、できたんですか？」

「なんとか。これで当分ゆつくりできる」

自称、三文小説家はもつれた髪を掻き回すと、初夏の空に大きく伸びをして、しばしの開放感を楽しんだ。

締切が迫っていようと暇だろうと、この穏やかな時間を過ごすための努力は惜しまない秋夜だが、やはりすべき事を片づけたからこそ得られる安らぎは格別である。

「蜜さんが来てくれるようになって、仕事が早くなっただって編集さんに褒められるんだよ」

かち合った目に微笑みをくれる彼に、じくりと痛んだ小さな胸。

「私でも、お役に立つことあるんですか？」

傍目に見たら、邪魔をしているようには見えないのだろうか。

いつだって優しく迎えてくれる秋夜は否やを言わないから、だからこそ小さな不安を抱えることだってある。

探る視線に、だけどやっぱり彼は首を振るばかりなのだ。

「うん、いっぱいあるよ。…そう、何かお礼をしなくちゃいけないくらい」

本気、だろうか。ああ、本気であろう。

真剣に考え込んでしまった秋夜に、蜜から痛みは消え去った。

「じゃあ…アイスクリーム食べたいです」

些細で、可愛らしくて、彼女らしい望み。

旧型冷蔵庫の中で眠っていたミゾレは力チ力チで、スプーンも通らなかったけれど、のんびり溶けるのを待ちながらたわいもない話

ができたのが楽しくて。

「さようなら、また明日」

「うん、また明日。気をつけて」

日が落ちる前に手を振るのが、2人とも少しだけ寂しかった。

今日も、玄関脇を抜けて、縁側へ。

いつもより遅くなってしまったから、蜜は小走りにその短い距離を抜けたのだけれど。

「あらら」

心地良い、というにはいささか強すぎる西日に焼かれて、彼の人は眠っていた。

少々歪んだメガネのフレームはつけたまま横になることに抗議して飛び跳ね、いつも伸び放題の髪で隠れている顔や目元は、久しぶりに理容室の恩恵に預かり露わになって、うっすら汗ばんでいた。起こすことを憚られるほどぐっすりと寝入る姿に、今日は帰ろうかと思いかけて彼女は秋夜の姿にどこことない違和感を覚える。

なくなっているのは、髪ばかりではない。何か、他に、あるべきものが、他に。

「ん？んー？」

そつと忍び寄りしゃがみ込んだごく近く、首を捻りながらじーつと観察して、やっと気づく。

「あー、ヒゲ」

てんでんに生えていた無精ヒゲが、ない。

元々そんなに濃くないせいか、剃ってしまうときれいな肌色を露出しているそこは、なんだか思い切り不自然でちょっぴり彼を知らない人に見せていて。

こんな特徴的なものを見落とすなんて、随分マヌケだと思いながらも蜜は立ち上がる。

どこかそわそわ落ち着かない気持ちを宥めるように唇を噛んで、迷ったあと今日は帰ってしまおうと決めて。

「また、明日…」

お決まりのセリフを残して踵を返した蜜のスカートが、つんと引かれた。

「行っちゃうの？」

振り向くとノロノロ体を起こした秋夜が、欠伸をしながら少女を見上げていた。

目を閉じていた時はわからなかった、ヒゲと髪のない顔が妙にキレイに見えて、収まりかけたはずの奇妙に高揚した感情が、蜜の心臓をどきりと跳ね上げる。

けれど、それは一瞬。

ずり落ちたメガネを面倒そうに押し上げる仕草も、目尻に浮かんだ涙を子供みたいに拭う様子もいつもと何ら変わらない良く知る秋夜だったから、溢れかけの気持ちは急速に縮んで霧散した。

ほらもう、微笑むことだってできる。

「良く、眠ってみたいだったから、そうしようかなって」

徹夜明けじゃ、ないんですか？言外に問うと、アタリと舌を出した彼は枕代わりにしていたらしい小説を示してみせた。

「面白くてね、ついつい朝方まで読んじゃったから。でももう、起きたよ？」

アイスもあるし、寄っていかない？まだ眠そうではあるけれど、本人がそう言うのだから。

「じゃあ、もう少し。お日様があそこに隠れるまで」

いつもの場所へすんと腰を下ろした蜜が指したのは、緑成す山の上、沈むまでしばし猶予のある太陽。
「うん」

嬉しそうに、本当に嬉しそうに破願した秋夜を目の端に止めた少女を襲う、本日2度目の不整脈。

なんなんだろう、今日は。どうしてこんなに胸が騒ぐのか。
「待っててね」

のそり立ち上がって台所へ消える背中を見送りながら、いつもより少しだけ早い胸を押さえる。

理由はわからないけれど、呑気な後ろ姿を眺めていたら苦しいような楽しいような、不確定な気持ちは薄れて消えて。

渡されたイチゴアイスと、夢中で読んだという大作の感想が面白かったから。

開き始めた蕾がまた固くなってしまったのに、蜜はちっとも気づかなかった。

そこを初めて知ったのは秋の終わり、木々がすっかり葉を落としてしまった頃だった。

幾度となく行き来している学校前の坂道がその日に限ってやけに遠くて、回る視界と上がった息に耐えきれず、へたりとその場に座り込む。

折り悪く今日の蜜は遅刻なのだ。朝からどうも体が重く、けれどどうしても休みたくない授業があったから、1時間横になって登校した末の出来事。

普段であればそここに見知った顔があるはずの通学路も、そん

なわけに閑散としてうら寂し。

誰かの助けを借りねば動けそうもないのに、縋る相手さえいないというのはなんと心細いことか。

声を出すのさえ億劫で、深い深いため息をついた蜜は目を閉じて、ままならない現実から逃避する。

今時珍しいくらい逼迫した財政事情のある家庭で育ったため、彼女は携帯電話というものを持っていない。

故に現状を身内にも友人にも伝える術はなく、ただひたすら親切な誰かが通るかかってくれるのを待つばかり。

願わくば、制服女子であれば美醜を問わない変質者や、他人に親切にするくらいなら舌を嚙むほど極端な人嫌いではない人に見つけてもらえますように。ついでに聖人のごとき善意に溢れていますように。

そう、祈ることしかできない。

そして朦朧としながらうずくまること数十分、救いの主は現れた。

「先に宣言しておくけどね、僕はロリコン趣味もないし怪しい人間でもないんだ」

まるつきり言い訳である前置きのおかしさに、のろのろ顔を上げた蜜は、言葉の意味を正確に理解したあと妙に納得する。

着古しヨレヨレの衣服と伸ばしっぱなしでボサボサの髪、背が高いせいで威圧感があり怪しさと言ったらこの上ない男が心配そうなそれでいて不安げな表情をして立っていた。

女子中学生に声をかけるならば、なるほどそれ相応の但し書きをしてからでなければ悲鳴を上げて逃げられること必至であろう。

ただし、そうしたからといってこの男の不気味さは少しも揺るがないのだけれど、けれど。

「はい、信じます」

なのに、蜜は何か浮かべた笑みと共にさらりと口にしていた。
それはまさに直感。

彼の纏う穏やかな空気が得体の知れなさを払拭していると少女は判断し、目の前の人物を信頼できると決めたのだ。

蜜の屈託のない素直さに一瞬面食らっていた彼も、すぐに相好を崩すと照れくさそうにポツリ漏らす。

「…ありがとう」

平凡でいて非凡で、秋夜と蜜はそんなふうに出会って。

助けてもらったお礼に手作りクッキーを運んだのは2日後、その
またお礼にお茶に誘われたのは翌日。 縁側で交わした会話が年の
差を乗り越えたフィーリングでぴたりはまって、奇妙な茶飲み友達は
今日も集う。

「こんにちは」

「いらつしゃい」

お茶と笑顔と呑気な話題と、ほんの少しの温かな気持ちと。

秋の陽は釣瓶落とし。

まだ残暑も厳しいというのに、夜は刻々と長く深くなり、秋夜と
の時間を奪っていく。

それが寂しくて物悲しくて、日ごと蜜の口数は減っていて、

「蜜さんに元気がないのは、何故？」

とうとう彼に問われるまでとなった。

「だって…」

穏やかに覗き込む眼差しにぶつかって、少々膨れて紡ぎ出した言葉は途切れる。

昨日より今日、今日より明日と一緒にいられる時間は減るのに、少しも変わることはない秋夜。

自分だけが不満で子供みたいな我が儘で沈む気持ちをぶつけるなんて、なんだか少し悔しかったのだ。

「蜜さん？」

「なんでも、ないです」

顔を背けて気持ちを幼稚な感情を押し隠そうとしたのに、柔らかな声が追ってきて逃してはくれない。

彼の人柄から答えを強いることはないけれど、彼女が答えるまで秋夜は根気よく待ち続けた。蜜が居たたまれずにもじもじと口を開くまで、ずっと、微笑んだままで。

「…だって…」

「だって？」

短くなつた髪が隠さなくなつた彼の顔は、気後れするほど綺麗に夕日に輝く。

「だって…夜が、長いから」

零してからしまったと、趣旨がわからないではないかと口元を押さえた蜜に、ああ、と納得顔で頷いた秋夜は考え込むそぶりですく首を傾げる。

「うん。秋はね、冬も…蜜さんに会える時間が減っちゃうのは、僕も辛い」

長年連れ添った夫婦みたいだな、などと考えながら彼女はとっても嬉しかったし、幸せだった。

共にいる時間が削られることを嘆いているのが、自分だけではない。

彼にとつても、2人一緒の時間が大切だったと知れて。

たわいもないことしか話したりしないのだけど、テストの役にたったり先生に褒められたりすることではなくとも、会えず声も聞けなくては一日が終われないほど蜜にとつて秋夜は生活に深く浸透しているから。

「もつといっぱい、一緒にいたいです」

「…そうだね。もつと、ずっとね」

その日から坂道を下つて少し、月だったり星だつたりを眺めて殊更ゆっくり、2人は帰路を歩くようになった。

手も繋がず、けれど肩は触れそうに近い静かな夜道を。

生まれたての、某かの感情を抱いて。

気づいたことが、ひとつ。

それは自覚した途端大きく大きく膨らんで、あつという間に蜜を苦しくさせる。

少し眠そうな顔が好き。喉の奥で笑う声が好き。優しい目や、大きな手や、聡いところや、全部全部、秋夜が好き。

だから、躊躇う。

あの門をくぐれば会えるけれど、会えば気持ちが溢れるかも知れない。溢れたらきつと、元には戻れないのだ。

子供のくせにと笑われたら、本当の恋ではないと言われたらもう立ち直れないだろう。

冬の匂いが濃くなったこの頃は一層切なくて、今日も蜜は大好きな人に会えないまま踵を返す。

枯れ木だらけになった庭を縁側から眺め、秋夜は随分と久しぶりでタバコに火をつけた。

落日と同じ色の火先が製造する煙を深く吸い込んで、その落ちた味に顔を顰める。

「…しけたかな」

数本残ったこれを引き出しにしまい込んだのは1年近く前。

『タバコ、吸うんですか？』

見上げて問う表情のあどけなさを大人の毒で汚してはいけないような気がして、以来ピタリとやめたのだ。

あれから彼女との時間は、仕事の息抜きのようにで生活の中心のよう。そんな一時を密かに逢瀬と呼ぶようになったのはいつからだったのだろう。

最初は、物珍しさが先立った。がさつな弟等と違い大人しくて可愛いくて、警戒心なく懐いてこられる妹のような彼女を見ているのが楽しくて。

まさか、馬鹿なと笑いながら、抜き差ししないところまで嵌り込んでしまった後は、自分と同じ好きに蜜が堕ちてくれるまで、辛抱強く待っていたつもりだったのに。

「嫌われた…？」

ここ数日、ピタリと姿を現さなくなった彼女に、不安が募る。
なぜ？上手く隠していたはずの浅ましい恋情が露呈して、怯えさせてしまったのだろうか。

記憶を辿っても、冴え冴えと輝く月の下、手を繋いで別れを惜しむよう微笑んだ蜜しか思い出せない。

胸の温かくなる、笑みしか。

「…輪つか、作れますか？」

己のうちに深く沈んでいた秋夜を一瞬で引き上げた涼やかな響きが運んできたのは、恐怖。

もし、幻聴なら？振り返ってそこが暗い虚ろだったら？

殊更ゆっくり首を巡らすのは怯えているからで、薄闇に少女を認めた時、秋夜は無意識に止めていた息を吐き出した。

「作れるよ。…見たい？」

動こうとしない蜜を手招いて、にっこり笑ったのは彼の賭。

彼女が頷いてくれなかったら、近づいてくれなかったら、この恋は芽吹くことなく凍るのだ。永遠に。

「見たい、です」

心臓が止めていた動きを再開したのは、密が一步踏み出したから。さくりさくり、枯れ葉を踏みしめながら、2人の距離が縮む。

門を潜るには、14年生きてきた中で一番の勇気が必要だった。何度も躊躇い、坂道を行って降りて、太陽が地平に隠れるころや

つと、庭先に抜ける小道を踏み出せたのだ。

一歩一歩ゆつくり、歩き慣れているはずなのに未知の場所を進んでいるようで。

うまく、隠し通せるだろうか。いつもみたいに笑える？恋をしていない蜜だと、信じてもらえたら。

けれどそんな不安は、縁側でタバコをくわえる秋夜を見たらキレイに消えてしまった。

初めて見る姿、知らない秋夜の表情が夕日の名残にぼっかり浮いている。まるで幼い自分を否定するように、冷たい無表情をして。

（や、だ…置いていかれちゃう…）

なぜそう思ったのか、無性に恐くてどうでも良いことを口にして彼の意識をこちらに引き寄せたのは、本能の為せる技。

「…輪っか、作れますか？」

呑気な声とは裏腹に、早鐘を打つ心臓は蜜の胸を破る勢いで走っている。

仰ぎ見る秋夜が微笑んでくれるまで言いしれぬ恐怖に戦きながら、じりじり時間を辿ってひたすら待った先に、

「作れるよ。…見たい？」

変わらぬ、彼だった。

1年と少し見続けた表情、常と同様ゆつたりとした仕草、少年のような笑顔。

さっきに見たのは幻で、2人の間に流れる時間はなんの変化もないと安堵して、手招く指先に踏み出す。

「見たい、です」

落ち葉を砕く音さえ楽しく、横たわる問題などキレイに忘れて、あと数歩で指定席へ、秋夜の隣へ。

「蜜さん」

硬質な声に、途端、空気が凍り付いた気がした。

さつきより近くなった彼が見知らぬ美貌を湛え、ピタリと動きを止めた蜜を静かに見つめている。

嗚呼、その真剣な表情に潜むのは、一体どんな感情か。

やはり、秋夜に気持ちいを隠し通そうなどと浅慮に過ぎて、なにもかも見通した彼は言うのだ。

『身の程を忘れては、駄目だよ』

あの大人の顔で薄く笑われたら、くずおれてしまうかも知れないと蜜は震える。

秋夜がそんな無体を吐いたりしないと知っていても、萎えた足はもう踏み出せず、彼女はつと視線を足下に泳がせた。

「僕が君を好きだと、困る？」

思いもかけない言葉は、理解できるまでに時間を要す。

「友達の好きじゃ、ないよ？抱きしめて、口付けて…そんな好きだ」

じわりと染みこむ、まるで麻薬のような。

夢から覚めるのを恐れるように、蜜はのろのろと顔を上げ、ほぼ

闇に溶けてしまった秋夜を、それでもはつきり輝く瞳を見つめた。
夢ではないと、確かめて。

「困ら、ないです、絶対。…秋夜さんこそ、困らない？私が、子供で」

「ははは、まあ、ちょっとはね。でも、大人には理性があるから大丈夫」

ちよいつと再び手招かれ、自由を取り戻した蜜は今度は躊躇うことなくいつもの場所へすとんと腰を下ろした。

それは肩の触れる微妙な距離。いつもより近くて、でも恋人と言うには遠すぎる。

けれど、2人にとっては丁度いい、そんな距離。

「明日も、晴れるかな？」

「きつと」

星が無数に瞬く、世界にとってはいつもと同じ夜だけれど、彼等にとって特別な、特別な、夜。

「先生、聞いてます？ねえ！」

「うん、聞いてるよ」

ピンストラップのダークスーツに臍脂のネクタイ、後ろに撫でつけた髪も細いチタンフレームのメガネも、常の秋夜からはかけ離れた姿であるが、隣で騒ぐ女編集者はそれを知りもしないのだろう。

煩わしさを我慢してやりわり腕にかけられた手を外すと、彼は豪華なロビーを抜けてくるはずの姿を捜して背伸びする。

「もう！早くしないと授賞式が始まってしまふんですってば！先生が主役なんですよ？」

「わかつているよ」

なんとかという大層な賞に輝いて、いついつの予定は開けておいてほしいパーティーがある、と言われたのはまだ、1月前の話だ。いくらなんでもその内容を忘れるほど脳の働きは悪くないし、今だって時計くらい読めるのだから、時間がないことも理解できる。だからこそ、彼は首を傾げるのだ。

「でも、まだ15分ある。打ち合わせは既に終わっているんだし、開会直前まで僕がここにいるても、誰も困らないだろう？」

「それは…そうですね」

ばつが悪そうに口ごもる彼女の目的など、分かり切っていた。

秋夜は他人に興味がない。人にどう見られようがどう思われようが、基本的に自分がよければ問題ないと思っている自己中心的人間である。

だからといって人の心の機微が読めないほど鈍いわけではないのだ。むしろそれらがわかりすぎるからこそその人間嫌いで、世捨て人なわけだ。

地位も名誉も金も持っている男を獲物と見定め、手に入れようと手ぐすね引いている着飾りすぎた女など隣りに立たれるのもいやだ。まして、彼の邪魔をしようなど許し難い。

「私は…」

感情が顔に出ない秋夜の本音を読み取ることもできない彼女が、再び伸ばしてきた指をするりと躲すと彼は、待ちかねた人物の姿を

遠くガラス張りの向こうに見つけて微笑んだ。

「失礼」

もう、我慢の必要はない。面倒な説明をしなくても、手を繋いでいれば無粋なことをする輩はいないはず。

「遅れて、ごめんなさい…っ」

駆け寄って歩きづらそうに裾を捌く少女に手を貸すと、秋夜は呆れるほど派手に相好を崩した。

「蜜さん、すごくキレイだ」

朱色の振り袖に身を包んだ彼女は、日本人形のように清楚な美しさがあつて、できるなら秋夜はこのまま家に帰りたいと切に願ったほどで。

誰にも見せたくない。せつかく着飾ってくれた蜜と、手を繋いで月光の下、散歩できたらどんなに楽しいか。

とりとめない話をして、くすくす笑い合つて、あの古い家の小さな庭で、甘く優しい口づけを交わして、そして…。

「本当に？変じゃない？私、ドレスなんて持っていないから、お姉ちゃんの成人式の着物、借りたんです」

秋夜の暴走した思考を止めた不安げな声に、似合ってるよと微笑んで彼はいつものように手をさしのべた。

「行こうか？ちょっと挨拶したら終わりだから、そうしたらどこかでご飯を食べて、家に帰ろう」

「…はい」

はにかんで微笑む少女と連れだって会場へ消える後ろ姿は、今日、自分が主役だと言うことなどすっかり念頭にないこと請け合いなのだ。

そして、もう1人。完全に忘れ去られていた女編集者はギリツと唇を噛む。

インテリヤクザの如き男と、あどけないお嬢様風の少女。実態はどうあれべったりくっついた2人は傍目にどうも犯罪くさく写るのであるが、当人達は気にするわけもなく幸せ全開ではないか。

「なによ、あれ。恋人同士にしたって、大っぴらに関係公表して大丈夫な年の差なワケ？」

「大丈夫だよ」

悔し紛れの独り言は、聞き止めた好々爺によって返事をされてしまつて、振り向いた彼女は凍り付いた。

「へ、編集長！」

職場の最高責任者は、常と変わらぬ微笑みを湛えて相変わらず容赦なく厳しい現実を突きつけるのだ。

「彼女ね、彼の奥さんだから。一年日参して奥さんの御両親を根負けさせて、16になると同時に出嫁に貰ったんだよ。いやあ、あれは良い結婚式だったなあ…。ま、そんなわけで、先生を怒らせて書いて貰えないなんて事になる前に、諦めるんだねえ」

業界じゃちよつと有名だよ？

楽しそうに古くさいウイंकをされても、そんな逸話を入社1年目の彼女が知るはずもない。

さっき初めて会ったベストセラー作家があんまりにも結婚相手の条件ぴつたりだったから、粉をかけていたに過ぎないのだ。しかし、妻帯者とわかれば、ましてあれほどの愛妻家とわかれば、勝ち目のない勝負はしない主義の彼女。

「そうします」

他に独身作家は山といえるんですもの。

高飛車に言い放って、あっさり秋夜をリストから削除する。
ただ、それは負け惜しみになるであろうと、編集長は知っていた。
だって、文壇中搜したって、秋夜ほど若く眉目秀麗で高収入、ついでに浮気の心配のない男などいないのだ。
大抵、そんな男ほど早く他人のものになっているから、宝くじを
当てるほどの確率で好条件の出会いには捜さなくてはならない。けれど。

「ま、がんばってねえ」

あのバイタリティがあれば、なんとかなるかもしれないと、彼は
密に彼女の幸せを祈ってみたりもした。

ついでに、周囲から浮きまくっているほのぼの夫婦の幸せもまた、
一緒に。

「若人の幸せが、日本の明るい未来に繋がるからね」

確かに、その通りなのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0049w/>

佐久間さん家の恋愛事情

2011年8月26日19時10分発行